

卷頭言

可能性を拓きうる時代

中野 光

(中央大学)

必ずしも自分の意志だけではなかったのだが、私は一つの国立大学と三つの私立大学に、ほぼ十年ごとに転任した「渡り鳥」的^レ大学教員となつてしまつた。

一九五九年の春、国立大学の新米の専任講師となつた最初の日、教務課に出頭して「閻魔帳」をもらつて教室へ行くと、数十人の学生達が静肅に私を待つていてくれた。隣の教室では老教授が教壇でノートを読みあげ、学生は一斉に蒲鋒のようにうつむいてそれを筆記していた。

「旧い大学」がまだ生きている、と思つた。駆け出しの私は「老練さ」よりも「若さと熱心さ」で学生とのつながりを大切にしようと、講義の準備にも四苦八苦しながら力を入れた。講義のためのノートもつくつたが、今から思うと、その内容は、先人の業績からの引用が多く、オリジナリテイにとほしいものだった。六〇年代の後半、大学教育の大衆化がすすみ、日本の大学はその内外で困難な課題に遭遇することになった。さきの老

教授のようなばあい、もはや学生へのメッセージはとどかず、学生からの要求も教授や大学当局へはほとんど通じなかつた。私はその頃、ベルリン大学の創設にかかわつて近代大学の理念を確かめた教育学者、シュライエルマツヒエル (F. D. Schlegel, 1768~1834) の大学論を読んで新鮮な刺激をうけた。彼は大学の生命は学生たちに「学問の精神」(Wissenschaftliche Geist) を感じとらせ、真理の探求者たらんとする意欲を彼らの内に育てることにあると述べ、大学の教師は研究者であると同時に若者の魂にふれるような魅力的な講義ができる教育者でなくてはならない、と説いていた。「学問研究と教育の統一」という課題が彼の大学論の核心にあつた。

一九六九年の春、私はシュライエルマツヘルの大学論の訳者でもあつた梅根悟先生が学長に就任されていた和光大学に転任した。時あたかもあの大学闘争の嵐がそこにも吹き荒れていた。私は手荒な

学生たちの言動に辟易しながら、自らの教育実践を総括し、展望を拓く必要に日々迫られることになった。

ところで、日本の教育史において「教育実践」という概念が自覚的に使われはじめたのは、一九三〇年代の生活綴方の教育を中心とした民間教育運動の中においてであった。それ以前には教育の「実際」とか「実地」ということばが使われることはあつても、「実践」という概念は、まだよそよそしく、縁遠いものであつたようだ。それが一九三〇年代の半ば頃にいたつて「国策」とは違つた立場から「教育の仕事」にうちこんでいた教師たちにとつて「実践」ということばが新鮮なひびきと内容をもつにいたつたのはなぜだつたのだろうか。私はそこに国家主義的呪縛からの解放を求めて教育をおしすすめる主体の確立と、自らの教育的営為に対する客観的認識が成り立ちつたあつたからだ、と考へている。

残念ながら、日本の大学の教育にはそ

のような意味における「教育実践」概念は戦後といえども未熟のままであつた。

その何よりの証拠として、大学の専任教員の口からも「私は教育の素人ですが」という口調が出たり、まぎれもない大学教育の現場にありながら「教育の現場」を遠いところのように錯覚しつづけている人すら少なくなつたことなどがあげられるだろう。

八〇年代、私が勤めた立教大学文学部は、そこにおられた上田薫先生が「日本の大学ではめざらしく大学闘争を大学の再生にいかした大学」といわれたように、とくにカリキュラム構成とその運営に意欲的だつた。文学部の理念を「人間の再創造」とし、学科のわくをこえた新入生むけの共通科目、複数の教員が人間の当面する現代的課題に共同で迫る集中合同講義など、そこに参加すると、負担も重かつたが、内容はたえず新鮮で、他分野の研究者とも「出会い」と交流を経験することもできた。かつて、一九三〇年

代から四〇年代にかけて、当時の国際的教育運動を視野に入れて民間教育運動にもコミットしてきた教育研究者、たとえば、及川平治、阿部重孝らが「カリキュラム構成学」の必要を唱へ、自らも初等教育のカリキュラム改造プランを提示したことがあつたが、立教大学での試みは大学におけるカリキュラム構成学の一環でもあつた、と思つている。日本の大学において、大学教師自身による実践的研究は、初等教育のばあいにくらべると約半世紀おくれで本格的段階に入った、というのが八〇年代のおわりから九〇年代にかけての私の実感であつた。その実感をさらに強く裏づけてくれたのが、本誌の創刊であり、毎号の内容であつた。

一九九三年のいま、大学における教育実践はきびしい条件に制肘されつづけているとはいへ、教育実践史をふりかえつたとき、発展の可能性もまた拓きうる時代だ、と私は考へている。